

丸山某の養家であった行者越の一つの家は、旅籠渡世もしたが、実は代々の狩人であった。養父という人は、狩人こそしていたが、一方えらい剣術使いで、由あるもののなれの果てだろうとも言うた。それで家には鎗長巻の類が幾振りも飾ってあった。体は四尺幾寸しかなくて、一眼のちっとも引き立たぬ〔面〕構えであったが、剣を把っては並ぶものはなかった。行者の又蔵と言え、遠国まで響いていたと言う。

どうしたわけで、代々こんな処に棲んで狩人をしていたかは聞かなんだが、家は草葺の大きな構えであった。明治維新のおり、この辺りにも長州兵が幕府方のものの後を追うて入り込んだことがあった。抜身を提げた荒くれ武士が一六人、袴の股立てをとって鳳来寺道をやって来た時は、街道筋のものは全部戸を締め切って、隠れていたと言う。その連中が行者越の家へかかった時、軒に吊るしてある草履を抜身で指して、幾らかと訊いたことから、店に坐っていた又蔵老人と喧嘩になって、あわや一六人が飛びかかるかと思われた時、老人が落ちつき払って名を名乗ると、へへっと叮嚀に挨拶して去ったなどと言うた。狩人としての逸話はあまり聞かなんだが、剣術使いとしての話はまだあった。

ある時、旅の剣客と術比べをやったが、その武士が座敷に立っていて、やっと言うと天井を一回蹴っていた。これに反して又蔵の方はやっと言う間に、二回ずつ蹴って勝ったと言う。また近くのものが大勢集まった席で、誰でもいいから俺を押えて見よと言うて、畳の下を潜って歩いたが、それが速くてどうしても押えることが出来なんだと言う。しかしそれほどの又蔵でも、たった一度失敗したことがあったそうである。横山の某の物持ちとは懇意にしてよく遊びに行った。そしてその下男に、隙があったらいつでも俺を打てと約束したそうである。しかしどうしてもその隙がなかったが、ある日のこと又蔵が主人と畑で立ち話をしていた。下男は知らぬ顔で傍らで麦に肥料をかけていた。そして肥料を掛けながら畝を歩いて行って、又蔵の足元へ柄杓の先が行った時、肥料の入ったままぱっと脚を打つと、さすがに避ける間がなくて着物の裾を肥料だらけにしたと言う。その時ばかりは俺にも油断があったと言うて、閉口したそうである。

この男の娘が、前言うた養子を迎えたのであるが、女に似気ない気丈者であった。ある時一人で留守をしていると、深夜に門を叩くものがあって、大野から来たが一宿頼みたいと言う。その言葉に怪しい節があったので、そっと二階に上がって外を覗くと、黒装束の男が九人、手に手に抜身を持って立っていた。女房は鉄砲を片手に握って、ただいま開けますといいながら、開けると同時にどんと二つ丸を放したそうである。怪しい男たちはそれに驚いて、慌てて前の

坂を駆け降りて行った。なかに一人腰を抜かした奴があった。後からまた仲間が引き返して来て、そいつを引き摺って行ったそうである。

その女房は、もうとくに死んだそうである。たった一人血統を継いだ男子があった。もう久しい前であるが、雑誌「少年世界」の記者が、健気な少年として誌上に紹介したことがあった。小学校を卒業すると間もなく八名郡大野町へ奉公に出て、その翌年かに、主人の子供が川に溺れたのを助けに飛び込んで、共に溺れて死んでしまった。昔を知る老人達のなかには、ひどく惜しんでいるものもあると聞いた。しかしもう何ともしようはなかった。数年前、その一つ家も引き払ってしまったそうである。